

渡辺淳一

遠い過去

近い過去



manabu

近い過去 近い過去

渡辺淳一

角川書店

遠い過去 近い過去

平成七年二月五日 初版発行

著 者——渡辺淳一

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店



東京都千代田区富士見二丁目三三

千102 振替〇〇一三〇一九一九五二〇八

電話／営業部〇三三三八一七八五二一

編集部〇三三三八一七八四六一

印刷所——旭印刷株式会社

製本所——株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本は小社角川ブック・サービス宛にお送り
ください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

Printed in Japan ISBN4-04-883399-5 C0095

¥860,-

目次

I

初めてのアルバイト	9
ペチカ燃える夜	14
若さの裏に潜むもの	28
一万円の授業料	33
音痴の弁	39
外国で書く小説	43
北国と南国——季節に揺れ動く心——	47
コメント嫌い	52
東京礼賛	56
野口英世と将棋	61
ユトリロの人気	65
京の陰翳	70

II

作家のフランチャイズ

喫茶店にて

美しさと愛しさと

父母同伴

「秘すれば花」か

アンダルシアの悲劇

ガウディの風土

四季のない国

ある違和感

日本語で怒る

宴のあと

141 136 130 122 115 109 102 98 93 83 77

III

父の時代

二つの思い出から

春は曙

若き頭脳

ある夫婦喧嘩から

わたしの原風景

山が動く

右と左

親孝行したい時には

「この指……」とは、どの指か？

あとがき

装丁

熊谷博人

装画

内田正泰「鰯雲とまれ」
クレオ『四季の詩』より

遠い過去
近い過去

I

初めてのアルバイト

わたしが初めてアルバイトというものをやったのは、中学二年の冬休みであった。

当時（昭和二十二年）、わたしは札幌にいたが、戦後の混乱はなお続き、闇市全盛で、人々は毎日の飢えを凌ぐのが精一杯であった。大人達がそうであったから、子供達も今のようにはほんとはしていなかった。中学生でアルバイトするのは、珍しくはなかった。

わたしをアルバイトに誘ったのは、同級のUという、なかなか小才のきく男だった。

彼がもってきたアルバイトの口は、スキー屋の店員であった。わたしは家が山に近い円山^{やま}というところにあつたので、子供のころからスキーには自信があつた。そのころのスキーは今からみるとずいぶん地味で、カンダハート、エッジをつけていればちよつと威張ることができた。

わたしのスキーは旧軍隊で使っていたイタヤの平たい重いスキーで、カンダハートは留金の部分の大きい旧式のタイプで、エッジは安いのを自分で溝を削って取りつけていた。お

かげでエッジの端が波打ち、アイスバーンにいくとはがれる始末だった。

新しい型のカンダハート、硬いエッジのついたスマートなスキーを買うのがわたしの願いだっただけから、スキー屋の店員は喜んで引き受けた。

店は十坪ほどで細長く、両側の壁にスキーを並べ、あとは簡単な陳列棚があった。奥にはルンペンストープと円椅子を置き、そのわずかなスペースで金具の取りつけなどをやっていた。アルバイト代はいくらくらいだったか忘れてしまったが……。

わたしは商品ながら、憧れていたスキーと身近に生活できるので、大いに張り切っていたが、店は閑散としていた。

場所が薄野すすきのの外れで、店も小さく、新しくできたせいもあって、一向にはやらなかったが、店主は一向に慌てる気配もなく、「まあそのうち来るだろう」とのんびり構えてストープで服をあぶっていた。この親爺さんは四十に近く小肥りで、威張らず、陽気ないい人だった。

わたし達は約束のアルバイト代が払えないのではないか、などといらぬ心配をしながら、いささか暇をもて余していたが、そのうち、荷物を届ける用事を言いつかった。

行先の地図を書いた紙片をもらい、言われた荷物を櫓そりに乗せて引いていく。もちろんUと二人である。

わたし達は届け物の中身はわからなかったが、届け先はきまって、薄野のごみごみしたアパートの一室とか、料理屋の裏口であった。アパートの住人はほとんどが女であった。行くのは多く夕方だったが、女達はスリップの上にオーバーを着ていたり、開けたドアのあいだから布団や男の脚などが見えたりした。わたし達は子供心に、これがパンパン（外人専門の娼婦）だと考え、配達に行くたびに覗き見る世界に興味と不安を抱いていた。

こんなことを重ねているうち、どういうきつかけからか、一度荷物の中身を見てやろう、ということになり、雪の路地裏に櫓を引き入れ、Uと二人で荷物を解いてみた。

出てきたのは初めは樽につめられた味噌であったが、次いで米、醬油といった具合に、当時では誰もが求めていた主要食品ばかりであった。

親爺さんは表はスキー屋をやりながら、裏では闇屋をやり、運搬係にわたし達のような警察に警戒されない少年を使っていたのである。

わたし達は少しばかり驚いたが、闇をやっている人はそのころは別に珍しくもなかった。闇をやるのは悪いことだと頭では知っていたが、実際に悪いという実感はなかった。やりたければやればいい。しかし親爺さんだけうまい汁を吸うのはちょっと癪だ、という程度の気持だった。一月の半ばで、親爺さんはすでにスキー屋に見切りをつけ、スキーを売るほうには熱意がなく、店をあけてばかりいた。

「どうせ売る気はないんだからさ、ちょっと失敬してやろうよ」

どちらからともなくそんな相談がまとまったのは、冬休みも終りに近づいたころだった。まず手はじめにスキー蠟ろうそくを一つずつポケットに入れた。翌朝行ってみたが親爺さんは氣付いた様子はなかった。それで少し大胆になったわたし達は数日後に、再度決行した。Uが何をとったか忘れたが、わたしはバラになって箱に散らばっていたエッジを一台分かすめた。それでも親爺さんは氣付いた様子もなく、ストープに股間をあぶりながら、闇屋の仲間らしい人とホラとも冗談ともつかぬことを話していた。わたし達がアルバイトをやめたのは、この数日あとの冬休みの最後の日であった。

親爺さんはわたし達に約束のお金をくれて、「ラーメンという美味うまいいものがあるから食べさせてやる」と言った。

わたしはラーメンというものを食べたのは、これが初めてであった。

その時のラーメンは今でもはつきり覚えているが、麺はやや細く、焼豚とシナチクのほかに青菜とノリが二枚のついていた。

これ以来わたしはサッポロラーメンの本当の味は、醤油味のシナチクと焼豚とノリが入ったもので、昨今のように、味噌味のモヤシばかりを入れ、挽肉をお情けのようにまぜたのは全くの邪道だと思っている。とにかく大変美味うまいしく珍しいものを食べたといった印象

が強く、両親にそのことを言ったら、「ラーメン？」と不思議そうな顔をしたし、友達は何も知らなかった。

おそらく親爺さんにおごられたラーメンは、札幌でも元祖的なものであったのだろう。給料をもらったわたしは、当時ではかなり高級なスキーを親爺さんから安く分けてもらい、新しいカンダハーも買って、当初の念願はかなった。もちろんエッジは先にかすめておいたのをつけた。

スキー店はその年でつぶれ、その後、親爺さんはどこへ行ったか知らない。

だがラーメンを食べると、わたしは今でもスキーを思い出し、悪事へのかすかな痛みとともに、親爺さんへの懐かしさが甦^{よみがえ}る。

ペチカ燃える夜

最近、北海道は年々暖かくなり、雪もかなり少なくなっているようである。

わたしの子供のころは、家の二階の窓からとび降りても雪のなかに埋まるだけで怪我はしなかった。こんな乱暴な遊びをしたのは、第二次大戦たけなわのころで、映画で見た落下傘部隊の恰好かつこうのよさが忘れられず、近所の悪童を家に呼び入れては長靴をもつてこつそり二階へ上がり、窓ぎわに立つ。

「行け」という合図とともに、後ろに残った友達に背を叩かれ、気合もろとも、鼻をつまんでとび出す。一瞬、体が宙に浮いたと思うとたちまち雪煙とともに、全身が雪のなかにすっぽりのみこまれる。それから手足をばたつかせ、雪をかきわけ這はい出してくる。窓からより遠く、より豪快にとび降りた者が勝ちだった。

途中で母に見付かり、全身雪だるまのまま叱られた記憶が懐かしい。

この家は一部改築したが、とび降りた窓はいまでも残っている。